法然の〝自然〟観

――自然（じねん）と自然（しぜん）――

藤本浄彦
（佛教大学）

はじめに――課題の所在――

「自然」という語は、日常用語としては〝しぜん〟と音読することが通例であることはいうまでもない。しかし、この語が孕む文化的かつ歴史的意味を重視すれば、〝じねん〟と発音するか〝しぜん〟と発音するかによって意味合いが異なることも周知である。

一つには、「じねん（自然）」であり、例えば『老子』二十五章で「人は地に法り、地は天に法り、天は道に法り、道は自然に法る」といわれるように、「人為の加わらない自ずからある状態」を意味すると言われる。漢訳の『無量寿経』の後半には、そのような意味での自然の用語が多見される。言わば〝自ずから然ある〟の意味で中国と日本の仏教の用語として定着したと思われる。

一方で、「しぜん（自然）」は、古代ギリシアやローマ世界では「自分自身の内に運動の原理を持つもの」「本性」（physis＝natura）であったが、中世キリスト教世界において大きく変質し、例えば十七世紀のF・ベーコン等を契

機として、〝人間とは独立無縁な対象物として客観的に捉えられる現象実体〟を意味する名詞として受領されてきた。元来、森羅万象の対象的現象世界を「自然」の語が意味していたのではないが、十八世紀末に稲村三伯の『蘭日辞典』でオランダ語の natuur に「自然」という語が充てられて以来、自然＝nature ということに成っていった。(1)

このように、一つの用語「自然」は、〝じねん〟と〝しぜん〟という二つの音読のもとで別々の意味を持つことがわかる。そこには、その用語の持つ歴史性が横たわっているゆえに、本テーマへの関心の発端が副題で提起した点にあり、その歴史的ないしは言語的観点からの検討が必要であることはいうまでもないが、本発表では、この語が含み持つ二重の意味を重視し、仏教用語としての特色を法然の教行の中にとらえてみたい。

一　主著に用いられる「自然（じねん）」について

1．『選択集』の場合――引文と私釈――

①道綽『安楽集』よりの引文「若し起悪造罪を論ぜば、何ぞ暴風駛雨に異らむ。是れを以て諸仏の大慈勧めて浄土に帰せしむ。たとい一形悪を造るとも、但能く意を繋けて専精に常に能く念仏すれば、一切の諸障自然に消除して定んで往生を得。何ぞ思量せずして都て去る心無きや」(2)

②『無量寿経』よりの引文「此等の衆生、寿終の時に臨んで無量寿仏、諸の大衆と與に其の人の前に現ず。即ち彼の仏に随いて其の国に往生し、便ち七宝華の中に於いて自然に化生して不退転に住す」(3)

③善導『観念法門』よりの引文「若し此の証に依って生ずることを得ざれば、六方諸仏の舒舌一たび口を出て已後終に口に還り入らずして自然に壊爛せんとなり」(4)

④善導『往生礼讃』よりの引文「六方の如来、舌を舒べて証す。専ら名号を称すれば、西方に至る。彼に到って華開きて妙法を聞けば十地の願行自然に彰わる」[5]

⑤善導『観念法門』よりの引文「護念経という意は、亦た諸悪鬼神をして便りを得せしめず。亦た横病横死横に厄難有ること無く一切の災難自然に消散す。不至心を除く」[6]

⑥法然の私釈文「第四に不回向回向対とは、正助二行を修する者は、たとい別に回向を用いざれども自然に往生の業と成る」[7]

2．『和語燈録』の場合――法然の言葉として――

①「一形悪をつくれとも　たゝよく心をかけて　ま事をもはらにして　つねによく念仏せよ　一切のもろ〳〵のさはり　自然にのそこりて　さためて往生をう」[8]

②「火界の修道はなはたかたかるへきかゆえに　西方に帰せしむ　ひとたひ往生をはつれは　三学自然に勝進して万行ならひにそなはるかゆへに　弥陀の浄国は造悪の地なし」[9]

③「総しては一食のあひたに三度はかり思ひいたさんは　よき相続にてあるへし　それは衆生の根性不同なれは一準なるへからす　心さしたにふかけれは　自然に相続はせらるゝ也」[10]

④「今度の生に念仏して来迎にあつからんうれしさよとおもひて　踊躍歓喜の心のおこりたらん人は　自然に三心は具足したりとしるへし　念仏申なから後世をなけく程の人は　三心不具の人也」[11]

⑤「たゝ心につら〳〵有為無常のありさまをおもひしりて　この身をいとひ念仏を修すれは　自然に至誠心をは具

する也　（略）念仏せん物むまれすは正覚をとらしとちかひて　すてに正覚をなり給へは　称念のものかならす往生すと信すれは　自然に深心をは具する也」[12]

⑥「五念四修も一向に信する物には自然に具する也」[13]

3．法然著作にみられる「自然」の用法

「自然」は、どこまでも〝じねん（自然）に〟であり、〝おのずから〟の意味である。それは、その行為が主体的に自己実現していくプロセスつまり時間の観念を含んでおり、状態（有り様）の内実をそのままに規定していく副詞的意味を持っている。

『選択集』の場合には、ただ一例を除いて、漢訳経典と中国仏教者の著作からの引用文で用いられている用例である。したがって、中国思想的な意味での用法を出はしない。

『和語燈録』の場合では、その事情が多少異なる。法然は、「①つねによく念仏せよ　一切のもろ〳〵のさはり自然にのそこりて　さためて往生をう／②ひとたひ往生をはつれは　三学自然に勝進して／③心さしたにふかけれは自然に相続はせらるゝ也／④踊躍歓喜の心のおこりたらん人は、自然に三心は具足したりとしるへし／⑤称念のものかならす往生すと信すれは　自然に深心をは具する也／⑥五念四修も一向に信する物には自然に具する也」という言い回しで、〝自然（じねん）に〟と語る。つまり、「～であるならば、自然に――となる」の論法は、～を行うことによって、それを行う者が「自らの恣意ではなくて、人為の加わらない自ずからある状態」へと生成していくという内実生成すなわち〝質的転換〟を語りだしているといえよう。

そのように、法然においては自然はどこまでも〝じねん〟であり、中国思想に淵源する意味を基本とした仏教用語として理解されることになる。但しそれは、阿弥陀仏信仰の教行を通して〝自ずから然り〟と言いうる在り方なのであるという点で、それは〝阿弥陀仏と念仏申す私との在り方〟の本質の問題なのであるということが特質的である。

このような意味での理解を、法然浄土教においてどのように特色づけることができるであろうか。法然の教行の立場は、『選択集』劈頭で標榜するように「南無阿弥陀仏　往生之業には念仏を先と為す」である。阿弥陀仏の「第十八念仏往生の願」に順じて南無阿弥陀仏と口称することを必要充分条件として成就するなりゆきが〝じねん（自然）に〟と語り出されると言える。さらに言えば、人間ではどうにもできない煩悩（貪り・瞋り・癡かさ）に塗える凡夫が、自分自身でいかんともしがたい自己の本性に従って自己の〝自ずから然ある〟と言いえる在り方を、念仏申すということを通して実現するということである。したがって、そのような自分自身でいかんともしがたい自己の本性を否定することではなくして、阿弥陀仏の本願の念仏を相続することによって〝自ずから然ある〟自己の真実が開かれてくると言ってもよいのである。

そのような、真実の自己が開かれていく様相の中で「生きる現実」を経験し、究極的には阿弥陀仏の来迎にあずかって極楽浄土へ往生するのである。そのような様相と究極性とを、この用語が奥行きを持って表現していることになる。

二　自然現象を介して説き示される教義――自然（しぜん）から自然（じねん）へ――

1．〝比喩〟としての自然（しぜん）――方便施設として――

①「人目をかさらすして　往生の業を相続すれは　自然に三心は具足する也　たとへは葦のしけきいけに　十五夜の月のやとりたるは　よそにては月やとりたりとも見へねとも　よく〳〵たちよりて見れは　あしまをわけてやとる也　妄念のあしはしけゝれとも　三心の月はやとる也[14]」

②「法爾道理といふ事あり。ほのをはそらにのほり　みつはくたりさまになかる　菓子の中にすき物あり、あまき物あり　これらはみな法爾道理也　阿弥陀ほとけの本願は　名号をもて罪悪の衆生をみちひかんとちかひ給たれはたゝ一向に念仏たにも申せは　仏の来迎は　法爾道理にてそなはるべき也[15]」

2．〝象徴〟としての自然（しぜん）――現象の昇華的受領――

①「貧道、昔し茲の典を披閲して粗ぼ素意を識り、立ろに余行を舎てて云に念仏に帰す。其れより已来た今日に至るまで自行化他唯だ念仏を縡とす。然る間希に津を問う者には、示すに西方の通津を以てし、適たま行を尋る者には誨るに念仏の別行を以てす。之を信ずる者は多く信ぜざる者は尠し。當に知るべし、浄土の教、時機を叩きて行運に当り、念仏の行、水月を感じて昇降を得たり[16]」

②「月かけのいたらぬさとはなけれとも　なかむる人のこゝろにそすむ[17]」

③「しはのとにあけくれかゝるしらくもを　いつむらさきのいろと見なさん」／「つゆの身はこゝかしこにてきへ

ぬとも　こゝろはおなしはなのうてなそ」[18]

3．自然現象を介して教義を説き示す意図――自然（じねん）への道づけとしての自然（しぜん）――

法然の教行は、「我、浄土宗（ヲ）立（ツル）意趣ハ、凡夫ノ往生ヲ示サムカ為ニ也」[19]と言われるように、自己自身が凡夫であるという自覚のもとで、凡夫が往生浄土しうる教えを対機説法したと言える。その凡夫の日常の生活において身近に捉えられる事象は、彼らが生活している現実の環境・自然であることはいうまでもない。

法然は、自らに出会って来る人々の心を開き救いの言葉を投げかけるにあたって、相手と共に自分が生活している現実の環境・自然の事象を共通話題とする視座を重視したことがわかる。共通話題とする視座を重視する時に〝対機説法〟の現実が展開する。法然が問答や説法や消息で語る言葉の故郷は、ここに指摘するような視座において在ると言える。

まず、1―①②で指摘されることは、〝比喩〟としての自然が方便施設として意味を発揮する。それは、凡夫にとって難解な教義を、凡夫の日常的経験の事象に引き込んで〝思いを巡らせて気づかせていく〟方法である。三心具足・仏の来迎の法爾道理が、見事に説き明かされて、聞く者への安心感が彷彿としている。

対機説法としての一対一の間柄において、その比喩が発揮する機能は、抽象的にして難解な教理を解きほどき、相手の意識深くに入り込むと言ってもよい。法然が、いわゆる「凡夫往生の教え」の教行に徹したと言いえる方法がこの点に見られる。

次に、2―①②では自然現象がそのレベルで留まらずに昇華的に受領され、〝象徴〟としての意味を発揮している。

教義の真髄を統一して語り、その言葉に触れる者の実存的在り方へと土壌的にまで受領されるといってもよかろう。それゆえに、その〝象徴〟的表現は教行のレベルにおいて主体的に具体化されるのである。

「念仏の行、水月を感じて昇降を得たり」とは、念仏申すことにおいて阿弥陀仏と念仏申す者（衆生）の間柄が、月と月を映す水のように両者が別々でありながら水面にしっかりと月があるという、いわゆる感応道交の境地を語っている。「月かけのいたらぬさとはなけれとも　なかむる人のこゝろにそすむ」は、『観経』の「光明遍照十方世界念仏衆生摂取不捨」の文で説かれる光明の働きであり、色光すなわち総用（すべてに漏れなく働く）と心光すなわち別用（念仏衆生に働く）とを、日常を足場としながら日常を脱却した昇華的世界として極めて象徴的に語っている。

そして、2―③では「往生を願う心」から「往生の成就」へというダイナミズムが、押し出すがごとく言語化されて、法然自身の全存在の意味づけと意義づけを究極的に収斂していく世界が窺われる。「いつむらさきのいろと見なさん」「こゝろはおなしはなのうてなそ」の言い回しの中に、阿弥陀仏の来迎を待ち浄土往生への願いが自然（じねん）に昇華していく世界を理解することができよう。

三　法然の〝自然〟観の特質――自然（じねん）から法然（ほうねん）へ――

法然の生涯をたどると、いわゆる自然環境を通して自然（じねん）に生成した思想教行があると言わなければならない。地方の一隅である岡山美作の稲岡の庄に生まれ、父との死別から孤独の身を比叡山そして西塔黒谷から東山麓吉水で、さらに晩年の流罪の身で瀬戸内海の塩飽諸島あたりまでの旅程から摂津国勝尾寺逗留を経て、最晩年に帰洛し吉水の庵で滅する一生は、自然環境の変化の中に身を置いたと言える。

その自然環境の中で無数の人々との出会いと共生とがもたらされたことはいうまでもないが、すくなくとも四十三歳立教開宗以後は「貧道、昔し茲の典を披閲して粗ぼ素意識り、立ろに余行を舎てて云に念仏に帰す。其れより已来た今日に至るまで自行化他唯だ念仏を綜とす。然る間希に津を問う者には、示すに西方の通津を以てし、適たま行を尋る者には誨るに念仏の別行を以てす[20]」と述懐している通りである。

その場合に、法然においては「自己の外なる自然（しぜん）」を客観的な事象としてではなくして、「自ずから然あり」と受領しうる主―客未分の契機、すなわち、象徴としての自然観が存すると言いえる。そのような「象徴としての自然」へと受領しうる契機こそは、「立ろに余行を舎てて云に念仏に帰」し「唯だ念仏を綜とす」る生き方の実現において在るのである。このことは、法然という人格にとって「自然（しぜん）」が、いかなる真実を露呈せしめたかという、極めて主体的にして余りに宗教的体験世界を物語っていると思われる。

或る時に法然が弟子の聖光に語った言葉として「世人皆な因縁有て道心を発す也。所謂る父母兄弟に別れ妻子朋友に離る等也。然るに源空は指せる因縁無く法爾法然に道心を発す故に師匠名を授て法然と号す[21]」とある。この言葉は、法然の出家が父の夜討に端を発する死と遺言によるという定説から見ると矛盾するのであるが、法然の心境としては「指せる因縁無く法爾法然に道心を発す」のであった。ここには、〝自ずから然り〟ではなくして〝法のままに然り〟であるという、仏法に透明に照らし出される法然の極めて自由自在な自己把握がある。このことは、どう理解されるであろうか。

四　結論にかえて

「自然」という語を、どのように音読するかに躊躇する必要はないという考え方もあるであろうが、この拙論では音読の相違が意味・意義の相違をもたらすということに注目した。その観点から、本論では、法然の教行の記録とみなしうる著作や語録を少しく事例として提示し考察し類型し理解を試みた。

「法然の〝自然〟観」というテーゼは、自己の外なるものとしての自然（しぜん）を主体的自己において信仰的教行を通して捉える時に、法然という生身の人間の人格において血肉化していく営みにおいてしか把握されえないと思われる。その場合、少なくとも四十三歳から称名正行に徹し晩年には〝一日六万遍の念仏相続〟の中に生きている姿に注目するならば、念仏の教行に貫かれた自然観であると言わなければならない。それは、宗教的主体性の問題であるということであり、その特質は、ここで指摘した通りである。

そこで敢えて加えて言えば、法然の〝自然〟観は法然（法のままに然り）へと深められている。すなわち、「自ずから然り」からさらに「法（真理）のままに然り」といえる特徴を有していることになる。

注記

（1）『比較思想事典』（伊東俊太郎執筆「自然」の項）東京書籍　二〇二～二〇四頁。
（2）『選択集』（土川本）第一章　二～三頁。
（3）同右　第四章　三九頁。
（4）同右　第十四章　一一六頁。

(5) 同右　第十四章　一一七頁。
(6) 同右　第十五章　一二〇頁。
(7) 同右　第二章　一八～一九頁。
(8) 要義問答（『黒谷上人語燈録（和語）』〈龍谷大学善本叢書15〉六〇九頁）、『昭和新修法然上人全集』〈以下『昭新法全』と略記〉六一五～六一六頁。
(9) 要義問答（同右　六一六頁）、同右　六二九頁。
(10) 十二の問答（同右　六三八頁）、同右　六三五頁。
(11) 諸人伝説の詞（同右　六六三頁）、同右　四六一頁。
(12) 念仏往生義（同右　六八三頁）、同右　六九一頁。
(13) 東大寺十問答（同右　六八五頁）、同右　六四四頁。
(14) 諸人伝説の詞（同右　六五九頁）、同右　四六七頁。
(15) 諸人伝説の詞（同右　六六四頁）、同右　四六二頁。
(16) 『選択集』（土川本）第十六章　一三三頁。
(17) 御歌（前掲『黒谷上人語燈録（和語）』〈元亨版和語燈録第五〉六六五頁）、『昭新法全』八七九頁。
(18) 同右（同右　同頁）、同右　同頁。
(19) 醍醐本「法然上人伝記」（藤堂記念会『浄土宗典籍研究（資料篇）』〈同朋舎〉一四五頁）、同右　四四〇頁。
(20) 『選択集』（土川本）第十六章　一三三頁。
(21) 『徹選択集』（「浄土宗全書」第七巻　九五頁）。